

山崎郷土報

NO. 109

19.4.28

兵庫県宍粟市教育委員会
社会教育課内
山崎郷土研究会
電話62-2000

大正九年 第一回

国勢調査についての考察

旧河東村文書

森本 一二

昨年四月の末に、神戸新聞姫路支社より突然電話があり、「大正九年、初めて我が国においても、国勢調査が行われたのであるが、その時の河東村長さんであった三木清次郎氏のご息女（早柏好子さん）から、河東村がこの国勢調査の重要性を訴え、その方法を指導する文書とともに『国勢調査の唱歌文書』を受け取ったが、これについて聞きたいことがあるので…」と電話を受けた。

これは私としては、全く不知の始めての問題であるので、何らの返答もできませんでしたが、まず第一に、「三木清次郎さんは河東村の村長さんでしたか」ということでしたので、これについては別紙の『昭和二年十月 郷土調査 宍粟郡河東小学校』の中の「村長・助役・収入役の異動」という明治二十二年以来の表を

目次

大正九年 第一回国勢調査について	森本 一二	1
「被」の世界	浅田 耕三	9
小野の秋葉講の思い出	赤松 末吉	11
会長退任あいさつ	森本 一二	14
会長就任あいさつ	春名 俊夫	14
事務局長就任あいさつ	宗平 圭司	15
事務局だより		15
平成十九・二十年度役員名簿		16
山崎町歴史街道（十三）	会報部	18

見て、「当時の村長さんは栗山捨藏さんであり、三木さんは大正十一年八月から同十五年八月まで助役に名が出ております。栗山さんは十六年の長きにわたり村長をされて、その後任として三木さんが村長になられ、以来二十余年にわたりその職に就かれたお方です。しかし、不学の私としては、国勢調査と地元の歴史についてコメントをと言われても、何も分からないので、お手元のその文書をコピーして電送してください。」とお願いしましたところ、早速国勢調査の告示と呼び掛け文、国勢調査の唱歌及び都々逸を書いた河東村役場文書（友進社納）を電送してくださいました。

一読して、その時点における河東村当局者の歌好みと、意気の

高さを感じました。それと同時に、同じ頃作られた河東音頭を思い出しましたが、突然の電話中であり、取り出してお話しすることができませんでした。

電話を終えて、別紙のような『河東農会音頭』と『河東音頭』並びに『女子青年団用音頭』を見て、なるほどこのような歌好き・音頭好きの村柄であるので、この国勢調査の大切さと、記入の心得を歌詞にして周知徹底を期しているのだとわかり、我が村の先人の心意気と文学性を今更のごとくうれしく思いました。

また新聞記者のお話の中で模範村云々の事がありました。そこでピンと来たのが、東隣の富栖村の村長『小林正則君頌徳碑』のことです。その中に「村長・郡会参事なぞ地方自治に尽くし、土木・銀行・国勢調査に大いに尽力」されたという文面を思い出し、それならばと、『安富町史』の近現代史を探しましたが、国勢調査に関する記事は勿論、その文字さえ見つかりませんでした。

ついで、『山崎町史』を探したのですが、大正九年の国勢調査についてはどこにも出ていませんでした。つまり、この国勢調査に係る記事は、公式文書には皆無であるということ。それが分かれると一層、この国勢調査に係る当時の河東村の文書の希有さと、重要な意義が理解できるのです。

また、これらのことを通し、私たちの古里、今はその名を止めぬ『河東村』を懐かしくそして誇りに思うのです。

◎国勢調査

一、本年十月一日には全国一斉に国勢調査が行われます。それは現に日本にいる人々につき、たとへ生まれた許りの小児でも一人も漏さず、その氏名、世帯に於ける地位、男女の別、出生の年月日、配偶の関係、職業及び職業上の地位、出生地、
□□別又は国籍別の八つの事柄で調べるのであります。

一、このために国勢調査員が九月の下旬に各世帯を訪ねて国勢調査申告書の用紙を配りますから、世帯主又は之れに代る人はその用紙の注意事項を読んで、間違ひなく書き入れ調査員が集めに廻ったとき渡して下さい。又書くことが出来なかったら調査員に代筆を頼んでも差支えありません。

一、各世帯から提出された国勢調査申告書は総て内閣の臨時国勢調査局で集めて種々確かな詳しい統計に作り上げます。それを仔細に調べて見ると、これまで分らなかったような社会の組立や経済の様相を明らかに知ることが出来ます。これが善政の基礎となり産業経営や国防計画の標準となり、又社会に関する学問の材料となるのであります。

一、この調べは全く社会の実況を知る為に行ふので、税金のためでも犯罪を捜す為でもありません。又実際ありのまゝを調べると戸籍や寄留とは別に関係がありません。申告書にある事柄は決して他へは漏しませんから、安心して有りのまゝを書いて下さい。若し萬々一不心得にも申告を拒んだり不実の申告をしたり、又虚偽の風説を流布して調べを妨げたりなどす

ると制裁があります。

一、本年から来春にかけて世界の文明国は皆国勢調査を行ひます。我が国も世界五大強国の一でありますから、国民はみなこの調べの大切なことを知って、調べにもれぬ様に又誠実に申告する様に心掛け、我が国始めてのこの文明的国家事業が外国に劣らぬ立派な成績を挙げるようにしたいものであります。

◎ 国勢調査の唱歌

一、国のもといは土地と人 土地は民あり用ふ可く

民あり政治おこなはる 民は国家の宝なり

二、宝たるべき人口の その総数が正確に

わからぬことは国の恥 人口調査は大切ぞ

三、これまで調べた人口は 帳簿の上の調べゆゑ

不正確にて国政の 羅針となすに難ければ

四、全国人口一人も 洩れなく同時の現在を

実地について調査する これが国勢調査なり

五、大正九年十月の 一日午前零時刻

その時戸毎世帯毎 山又海に居るものも

六、日本国民のみならず 外国人にいたるまで

一人残さず洩れもなく 早取写真にかけるなり

七、戸毎、の世帯主は 調査員のくばりたる

申告用紙にありのまま 記入なすべき義務がある

八、生れたばかりの赤子をも 名は名つけずと記入せよ

九、一夜とまりのお客でも 籍になくとも妻とかけ

尚も在郷軍人は 其時居れば書き出せよ

兵役兵種官等を

十、各自に記入せしむるは 自計主義とぞ名づけらる

代筆すなり調査員

十一、こんどの調べ八つあり 一人々々の氏名(一)やら

世帯に於ける其の位置や(二) 生年月日(三)男女別(四)

十二、配偶関係(五)職業や 職業上の地位(六)もあり

生れところ(七)其次に 民籍別や国籍(八)を

十三、その日の午前八時まで 記入しておけ申告書

是等八つの事がらは みな善政の基礎となる

十四、明治このかた帝国の 文化は月に日に進み

余すところもなき内に 一つ残れるこの調査

十五、文明国はすべてみな 五年ごとや十年に

行ふ事の例なるを 日本は今が初めなり

十六、国利民福計るため 国の尊きこの事業

ともに力をつくすべし 共に心を合わすべし

◎都々逸

主のおるすに申告義務を

とりてうれしい新所帯（不在所帯主の申告）

いやで今宵は帰すじやないが

国勢調査が気にかかる

是非に今宵は帰つてたもれ

国勢調査の時刻まで

国勢調査に洩れないように

名札出しましよ新所帯

ならう事ならわが家へかえれ

国勢調査の時刻まで（九月三十日ノ夜）

客も家人も下男も下女も

書かになるまい申告書

国のためなり我が身のためよ

嘘（うそ）を言わずにまっすぐに（罰金三十円）

分からぬ事はどこどこまでも

問えば係が教へませう（国勢調査員）

逢ふてうれしい今宵の首尾も

国勢調査にやかえられぬ。

税をかけたたり罪人探す

そんないやらしことじやない

あなたのお側に私を妻と

国勢調査が縁むすび

僕の妻じゃと書いたじやないか

国勢調査のアノときに

大正九年八月 河東村役場（友進舎納）

郷土調査 昭和二年十二月 宍粟郡河東尋常高等小学校

村長、助役の異動左の如し

就職年月日	退職年月日	在任年月日	職名	氏名
明治二二年六月五日	明治二四年四月三日	一年十月	村長	春名 庄平
〃二四年四月一三日	三二年四月二二日	八年	村長	春名 閑治
〃三二年四月一三日	三五年二月二〇日	二年十月	村長	森谷文次郎
〃三五年三月三日	三九年三月二日	四年	村長	横野 清司
〃三九年三月九日	四三年六月一六日	四年三月	村長	三木 仙吉
〃四三年八月二〇日	大正一五年八月一九日	一六年	村長	栗山 捨蔵
大正一五年八月二〇日			村長	三木清次郎
明治二二年六月五日	明治二四年四月三日	一年十月	助役	名賀 福蔵
〃二四年四月一三日	三二年四月二二日	八年	助役	森谷文次郎
〃三二年四月一三日	三九年三月八日	六年十一月	助役	三木 仙吉
〃三九年三月二八日	四三年三月二七日	四年	助役	保川正九郎
〃四三年六月一日	大正四年六月二二日	五年	助役	山下文之助
大正四年六月二四日	一一年八月二二日	四年二月	助役	山下 甚蔵
〃一一年八月二七日	一五年八月二二日	四年	助役	三木清次郎
〃一五年八月二二日			助役	内海□治郎

女子青年団用音頭

一、踊りましょうよ 袂もかるく

心合せて踊りませう

二、揖保の川瀬のあの若鮎も

水の流れを踊り行く

三、私しや播州河東育ち

米の出どこの愛娘(まなむすめ)

四、かまがほきから流るる水を

汲みて澄み行く心地よさ

五、目路(めじ)もはるかにあの野辺ゆけば

稲のそよ風 岸田村

六、共に手をとって共同田植え

かけたたすきも 矢原型

七、柳まねけば 学校の門よ

ここは神谷 なつかしや

八、ここは三谷の官林口よ

積みて挽き行く車道(くるまみち)

九、中の山へと石段のほり

松の翠(みどり)や神詣で

十、今日もはるばる三王(さんのおう)さんへ

どうぞ安産出来るやうに

十一、愛宕山には月影さして

夏の涼みの名所なり

十二、南うけるは 須賀沢部落

松の梢に茸(たけ) 香る

十三、踊ろ三つ星あの七つ星

流れ星まで冴え渡る

十四、盆のお月様笑顔でまるい

今年や豊年万作よ

十五、河の東はすみよい里よ

育つ私は 果報者

河東農会是音頭

茲に読み出す演題は

農会是のあらましを

山の松茸香りも高く

中に開くる三百余町

朝露深く西日を受けて

実るお米が五千石

この度此度農会が

部落農会集めて調査

負ふた借金七萬余円

これでならんと村人達が

茲に自力更生の

聲は揃へり農会是

古い百姓今改めて

播州宍粟の河東村

皆様方へお伝へ申す

前は揖保川流れて清く

これぞ祖先の開きし土地ぞ

黄金の波のただよひて

此処が我等の住む郷土よ

村の経済立て直さんと

忘れなざるな皆様方よ

流出田圃が五十ト余町

奮いたったる大会決議

誓いは固し村人の

足並みそろへて十年の計り

改良なされよ皆様方よ

一にや米麦二にや蚕

三にや山林柿栗山椒

四には養鶏五にや蔬菜

六にや牛馬副業興し

多角組織に改良なして

不断の収入増さねばならぬ

牛と土とは農家の宝

愛護なされよ山草刈りて

牛を肥やせば田圃も肥える

田圃肥えたらお米が四石

蚕飼ふには桑畑殖やせ

荒れた桑畑改植急ぎ

皆んな揃つて養蚕しませう

目標繭高一萬貫よ

戸毎に十羽の鶏飼ふて

卵産ませよアノ九千貫

戸毎に五畝蔬菜を作れ

品はまとめて共同出荷

山の改良や宅地を利用

柿栗山椒にサクランボ

金のなる木を植え込んで

共に殖やさん村の富

改良する事数々あれど

心合はせにや出来やせぬ

共に手を取り力を合せ

さあさあ植えませう今年の田植え

赤い襷をしつかり掛けて

並ぶすげ笠すずしい聲で

協同一致の四ツ田植え

広い田圃にあの花がさく

働く時にはわき目もふらず

遊ぶ時には愉快に遊べ

時を惜しんで無駄にはするな

余る労力農産加工

立てよ興せよ部落の方よ

実行なさるは皆様方よ

部落農会が盛んになれば

村の産業が自然に興る

主の出で立つ姿を見れば

勤勉努力の鉢巻きしめて

腹に不動のアノ意志の帯

腕に不屈のアノ襷掛け

主が外なら私が内よ

お留守いたすは私の努め

勤儉質素の襷をかけて

目深に手拭い姉様かぶり

家事にいそしむきりきりしゃんと かけた襷のアノ切れる程

自給自足は所帯の元で 廃物利用や節約いたし

今度決まった記念の貯金 毎月忘れずアノ組合へ

思ひ切りませよ改めましょう 生活改善お家のために

昼の疲れで帰つて来れば 妻が迎える笑顔と笑顔

主と苦楽をともにする 家はこの世の極楽だ

妻の所帯の持ち方よいか 年々増えゆく組合の

貯金の高さは村の富 資本借るには信用で

売る品あるなら組合で 共同販売いたしませう

高値で米が出ていけば 黄金の波が押し寄せる

買う品あるなら組合で 値段安くてよい品買へる

米麦蔬菜桑畑に 買って入れましょ組合肥料

買うにも売るにも一致して 貸しつ貸されつ共々に

これぞ共村共栄の 組合興せば家が富む

日毎月毎世の中進む 何時の何時まで昔のことを

言ふて居らりよか昭和の御代に 生きる百姓にや頭が一だ

修養なされよ青年達よ 今日の後れは一生の後れ

修養するにはアノ青訓に 行つて鍛へん心と身体

村の立てたる学びの園に 入りて磨かん技の道

鍛えし此の身何をかなさん 奮闘努力の足並み揃へ

磨きし此の業何をかなさん 研究改良一手に受けて

村を興すは我等の使命 共に興さん理想の郷土を

揃い揃つた踊り子衆よ 今日のお盆の農会踊り

みんな仲良く手に手をとりにて 家を興さん諸共に
 歌へ踊れよ皆様方よ 村を興せと打ち込む太鼓
 老いも若きも手に手を取りて 村を富まさん諸共に

河東音頭

流れも清き揖保川の 河の東に春が来た
 鋤をかついであぜ道を 歩む人々春心地
 麦の穂先もにぎやかに 出で揃ったる其の中に
 千に一つの黒穂でも 萬に一つのまぜり穂も
 さがして抜くのが我々の 身のため村のためなるぞ
 空にひばりの鳴く聲聞けば 早苗代の時なるぞ
 たくわへ置きたる初種を 塩水選も忘れずに
 品種統一心して 奨励品種を蒔きませう
 苗のよしあし実りを知らず したてよ育てよ丈夫な苗に
 畑に桑が芽をふけば 早掃立はやはきたてになりました
 蚕飼こがいのうちこがいに気をつけて には起きすれば急がしく
 家内揃って繭ちぎり 積んで見あぐる繭の山
 繭の村から生糸の町へ 流し流れてアメリカまでへ
 千里離れた他国の金を 細い生糸で引き寄せませう
 麦は色好く赤らんで 天気の良い時取り入れて
 お田植え時が来たならば 共同田植えをいたしませう
 植え付け時のこやしには 今年出来た組合の
 配合したる肥料をば 使っておけば大丈夫

赤いたすきの姉さん達が 並ぶすげ笠すずしげに
 あの田も植えてこの田も植えて さのほり酒を召し上げれ
 向こうの山で鳴くヒヨドリに 朝草刈りが目を覚まし
 歌の文句も面白く 朝露分けて刈りに行く
 暑い夏の日いとわずに 草を丁寧に取りませう
 時折吹き来る緑の波が 頬を撫でゆく心地よさ
 最早いなかに盆が来た 村人一同打ち揃い
 母校のかどに集まりて 心ゆくまで踊りませうよ
 踊ったからとて朝寝せず 朝は早うから草刈りに
 露の草をば刈りて来て 牛を肥やせよ今の内
 稲は穂が出た花盛り もしや白穂が見えたときゃ
 切り取り鎌を持ち出して 残らず切り取り致しませう
 二百十日も事なくすんで 見渡す限り一面に
 黄金の波が打ち寄せる 今年豊年万作だ
 祭りが来ました氏神様で 角力取るやら獅子が舞う
 祭りが済んだら吾々の 鉢巻しめる時が来る
 早稲刈りが始まった 家内一同が打ち揃い
 天気の良い日に刈って干し 稲木にかけておきませう
 長い夏中青草で 肥やした牛を引き出だし
 父が田を鋤く母や子が 一生懸命に鋤使い
 今ぞ百姓のいくさ時 汗のかいまで戦いませう
 あちらこちらに稲こきの 急がしそうな音がする
 米の良し悪し今一息よ 乾燥十分いたしませう

榊目はしつかり入れておき 検査受けたら皆甲よ

長い米秋済みました 母がおはぎをこしらえる

一に神仏二に道具 三にみんながいたただこよ

山のごとくに積み上げた 俵を見ながら父が言ふ

今年は配合肥料をば 使ったお陰で米は良し

たくさん取れたと家内中 俵眺めてえびす顔

酒米時じゃ米を売ろ 米を売るには組合へ

みんな揃って引き出して 共同販売致しませう

我等の作った其の米は 江戸長崎や国々に

広く世間に知れ渡り 今では他村の米よりも

五円高にも売れました こんな目でたい事はない

目出度い目出度いお正月 門松立てて祝いませう

何をなすにも村人が 共同一致の誠心で

河東村は模範村について

頭書に記しました神戸新聞姫路支社の方のお話の中で、「模範村云々のこと」がありました。私たちは若い頃から、河東村は模範村として表彰された素晴らしい村だったのだと、常々聞かされてきました。

この第一回国勢調査の頃の村長さんは、栗山捨蔵さんで、大正十五年からは三木清次郎さんになりましたが、この大正の末期から昭和の初期は経済恐慌の時代であって、河東村も疲弊に陥っていてたいへんな時でありました。三木村長は自力更生を強く訴

え、この頃読み出されたのが『河東農会音頭』でありました。

これを声高く歌ってみてください。

山の松茸香りも高く 前は揖保川流れて清く……

中に開くる三百余町…… 実るお米が五千石……

しかし昭和の初年には…… 負ふた借金七萬余円

流出田圃が五十ト余町 これならんと村人達が……

一にや米麦二にや蚕 三にや山林柿栗山椒

十羽養鶏 部落農会盛んにし 売るも買うにも一致して

共存共栄の組合興せば、家が富む……と歌い上げて努力した

ので、河東の酒米は、広い世間に知れ渡り 五円高にも売れまし

た。

なんと調子の良い音頭ではありませんか。

そのようにして、兵庫県の模範村として表彰されるようになったのです。また、河東音頭や女子青年団音頭などはお盆の十五日、小学校の校庭に高い櫓を建てて、若い衆・子ども等の踊りが

賑わい始めると、年寄りの見物連中も繰り出して、時間を忘れて踊ったものでした。

これら河東村の挙村一致の交流は、村長さん始め素晴らしい先達の指導と真摯な村民の努力の賜物でありましょう。

この国勢調査の説明書と関連の音頭などの文書を保存されていた早柏好子さんは、この三木村長さんの娘さんであります。

そもそもこの三木村長さんは、かの明治の日露戦争で二百三高地の激戦の武勲を立てられ金鶏勲章を受けられて凱旋された方で

す。河東村の役場に勤め、常に中枢を累進し、大正十一年助役、十五年より二十四年間にわたり、村長として疲弊した村を再興・発展させ、うち続く戦争に兵士を送り、英霊を迎えていられたのですが、ある時は百姓に返り、新嘗祭に奉納する粟を栽培し、神官のお祓いも受け、白装束で刈り取り、宮中に参内して納められ、表彰も受けられる平和もありました。

しかし、昭和二十年敗戦になると、レッドパージにかかり、公職追放になりました。実に、明治・大正・昭和の日本の興隆期と軍国主義時代の象徴的な人生を歩まれた方でありました。

悲しいかな、これだけの偉大な村長さんでありながら戦争責任を問われて顕彰碑もなく消えて行かれていますのです。

私は敢えて、国勢調査の珍しい資料に添えて、これに係わる河東村と三木村長さんの輝かしくも、隠れた事歴を追加記録させてもらいました。

以上

「被」の世界

浅田耕三

寒い時や暑い時を除いて春秋のよい季節に週一度、七、八人が集まって誠に気楽な勉強会を開いている。

半分はしゃべり合う雑談・雑学の会で、その饒舌の合間に近在家々から出た古記録、つまり古文書を読むのである。

一番多いのは『本多家文書』、すなわち山崎藩本多家の記録で、領内や本多家家中のできごとを右筆（ゆうひつ）が書き留めたものである。

古文書というのは、お家流と呼ばれる、書道の一派青蓮院流が江戸時代に大衆化した書体、あの独特の崩し字で書かれているもので、それを自由に読みこなしたいと思って努力しているのだが、これがなかなか難しい。

そして苦労してその難読の文字を一字一句たどしくやっと読み終えても、さらに厄介なことがある。それは文章そのものの晦渋（かいじゅう）さである。一、二、三百字程のページの文章が、さてそこに何が書かれているのか、詳しい文脈がさっぱりつかめない。しかも、その意味のよくわからないことの原因が十分にわかっていないのだ。とにかく敬語が多くて、そしてむやみに遠慮した言い回しで、文末にすっきりした断定、断言がこないのがある。句点から句点までのセンテンスがむやみに長く、尊敬と丁

寧の句法がくり返しくり返し使われていて冗漫冗長なのである。

「被」という文字がある。

学校時代の漢文の授業でご記憶の方もあると思うが、漢文における「被」は受身形の助字で、日本語文法でいえば口語では「レル、ラレル」、文語では「ル、ラル」の、品詞でいえば助動詞にあたる。

これが日本の古文書（といっても江戸時代の文書）ではすべて尊敬語として用いられているのである。日本人は実に器用な民族だとつくづく思うが、その和製敬語を至る所で書いているので書き役の右筆も書くのが面倒になるのか、手間を省いて「被」を「社」の行書体のような字形やら、また簡単に「、」で表記したりしている。

もう一つ多用されているのは文末などの「候」（そうろう）である。この文字も敬語の一つである丁寧語で、「ございます」の意味だが、やはり多用するから平仮名の「い」に似た形やら、「被」と同じく「、」で記している。「候」のもう一つの意味は動詞の「さぶろう」で、貴人の傍に「伺候する」「ひかえる」「うかがう」という謙讓語であるから一層使い勝手がよかったのである。

今手元にある古文書で一例を示す。

「同四日吉住伝右衛門去午年御留守居役被仰付御宛行五拾俵三人扶持二被仰付候 然処同年御借米被仰出 右御宛行ニテハ先知拾人扶持之内取過之分返納御借米中御差延被下候様相□御聞届

被成候」

この中には「被」が四文字と「候」が三文字あるが、このうち二つの「被」は「、」で書かれている。

さて、ではどうしてこのように遠慮気兼ねの極致のような文体で右筆は書いていたのか。そしてその長たらしい文章を当時の人は読んですつと頭にいれて内容をつかみ取っていたのか、誠に不思議な気がするが、おそらくこれは武家社会の厳しい身分制のせいである。私は考えている。

武士達も友人同僚同士で雑談などしている時は、もつとざくばらんに率直に日常会話をしていたのだろうが、あらたまつた公の場へ出仕して上役と話を交わす時は、平伏して言い損なわないう、無礼のないよう用心を重ねて言葉尻には必ず「○○と私は考えますが、如何でございませうか。ご教示を頂きとうございます。」といていたのである。

だからこんな文体の文章が書け、また読んでもちゃんと理解できていたのであろう。

侍の社会とは随分と肩の凝る窮屈な世界だったと、古文書の読解に難渋しながら私はあらためて想像している。

小野の秋葉講の思ひ出

赤松末吉

小野集落には元禄九年から三百年余りも続いている稲荷講があるが、それ程古くはないが、明治十七年以前から百三十年程続いている秋葉講もある。それを、古文書を参考に皆さんに御紹介する。

古文書は煤で黒くなっているので、判読出来るものを確認して綴った。

明治十七年の年号と干支と月と講員の名前が記入してある者が最古で、五名の講員で、正月、五月、九月の年三回お祭りし、明治四十一年まで続いている。明治四十二年頃より大正三年頃までは講員が八名と増えている。それが大正十一年から七名に減り、昭和四年から九名と増えて以後続いている。

昭和十三年にはお祭り後の「なおりい」は、おこわ飯、汁、豆、にしめ、酒適宜とする定めが記されている。

昭和二十九年五月から一戸に金拾円積み立てして、神社へお参りしたときお札を頂いて帰る費用に使うための準備金とした。

平成元年一月のお祭りより一月だけ、正月であるので夫婦揃ってお参りした後、水炊きで頂くことにしたが、これも準備が大変だったので一巡して中止した。

平成に入り、お祭りの後の「なおりい」も派手になってきたの

で、平成十年五月より、お茶と「つまみ」、茶菓子のみとするこ
とにした。

会員も平成十六年に八名となり、平成十七年には7名と減って
きた。

後を継ぐ者が絶えて若い者が町で生活している家もあり、止む
なく退会されることになりつつあるので、今後何年続くか不安な
現状である。以上、大体の経緯を綴ってきたので次に秋葉神社に
ついてお知らせする。

秋葉神社は上社の御神頭は静岡県周智郡春野町（現浜松市春野
町）秋葉山頂に、御本殿は昭和六十一年十月に遷座され、建坪百
三十坪総檜の入母屋流れ造りである。

下社は静岡県周智郡春野町（現浜松市春野町）領家の山裾にお
祀りしてあり、御祭神は火之迦具土大神（ひのかぐつちのおおか
み）といい、伊弉諾、伊弉冉（いざなぎ・いざなみ）二柱の神の
御子で、火の主宰神である。火の光は時間的、空間的に人間の活
動の範囲を広め、その熱は人間に冬の寒さをも克服させ、食生活
を豊かにし、そのエネルギーは工業、科学の源となると共に、そ
の威力は総ての罪穢を払い去るのである。光と熱と強いエネル
ギーを与えられたこの神は、文化、科学の生みの親として畏敬さ
れ、尚ばれてきたのである。

御神徳は火の恵み悪火を鎮め、諸厄諸病を祓い除く火防開運の
神として、火災消除・家内安全・厄除開運・商売繁昌・工業発展
の御霊験あらたかなるものとして、全国津々浦々から信仰されて

いる。

御霊験は奈良朝以来、屢顕れ、御神威は海外に行わたり、朝廷の御信仰篤く正一位の宣旨を賜って、正一位秋葉神社といっている。

御霊験の顕れについて昔から言い伝えられている実例をお知らせしたい。

昔明治時代に私宅の裏の家から火災が起きて、その家は全焼してしまった。私の家の裏に檜の大木があったが、類焼のおそれもあり、多くの人達がかけつけて家財を安全な場所へ持ち出してくださった。その時、急に風向きが変わって、幸いにして類焼せずに残ることが出来た。多くの人達のお蔭であったことに感謝しているが、この時私宅へ秋葉神社のお祭り、祠を御祀りしていたので、家族の者や居合わせた方々が秋葉神社の「祝詞」を一心に念じてお祈りしてきた。

御霊験により、お守り下さったのだと家族はもちろん、地域の方々も共に感謝してきた。この期から講員に入られた人もあったと老人から伝え聞いている。裏の檜の木も太さの半分程焼け残っていて、葉も茂って成長していたが、家を新築するときに切った。

次にお参りの思い出を綴ってみる。

講員から一度お参りしてみようとの話が出て、昭和四十七年三月十五日に山陽新幹線が開通したので、昭和四十九年十月に待望の新幹線に乗って、お参りすることにした。

今までに積立てした金もなく、費用は全員で負担することで決行する。講員九戸で十七名が姫路駅までマイクロバスで送迎してもらい姫路から「ひかり」で名古屋まで乗る。初めて乗った新幹線は16両編成だったが長いスマートな電車で猛スピードで走るのには驚いた。快い乗り心地に皆満足したものだ。

名古屋から浜松まで「こだま」に乗り換えて十二時すぎに到着下車した。駅近くの食堂で昼食をとる。浜松は「うなぎ」の養殖が盛んな所なので、うなぎ弁当を食べた。大きな弁当箱に一ぱいのうなぎが乗せてあり、おいしく頂く。

又、「う酒」といって焼いた「うなぎ」に熱燗を注いで飲む。初めて飲んだがおいしかった。男は九名だったが皆、喜んで頂いた。これを若い女中さんが見て、声をかけてきた。「お客さまくどかない」と言うが、何を尋ねているのかわからず、じっと考え込んでみると、連の中の誰かが急に「くどかない、くどかない」と返事した。どう理解したのか後でみんな大笑いしてしまった。どうやら「うなぎ」の油濃いのを熱燗の酒を注いで飲んでいたので、油で「しつこく」ないかと尋ねたのを頓知よく返事したのだった。後でよく考えて見れば誤解であったが、いまでもお参りの度事に、この話が出て当時を思い出している。

浜松から遠州鉄道の定期バスで、気田川に添って曲がりくねった道を登り山を三つ程越えて、夕方五時頃下社に近い門前屋旅館に到着する。

登る途中の川は九月の台風で、あちら、こちらで水害が発生し

ていた。門前屋旅館は下社の大鳥居を潜って入るので、大鳥居をバックに記念写真を撮る。第一日目は旅館で一泊して疲れを癒し、下社は旅館から歩いて五分くらいの山裾にあるので、朝食前に全員揃って参拝して御祈祷をして頂き、お祭りのとき祀る掛け軸とお札を頂いて帰る。朝食後初めてのお参りだったので旅館で土産物を買う。二日目は逆のコースで帰路につく、バスで浜松駅まで出て浜松から姫路までは新幹線で帰り、姫路までマイクロバスに迎えに来てもらい、姫路で夕食をすませて帰る。旅館で一泊二食の宿泊料より、前日浜松での昼食代の方が高かったと会計報告を聞いて驚くと共に、いまでも思い出話がよく出る。

以後五年位してお参り出来るように積立金として一戸に五千円の会費を年三回積み立てて行くことに決める。

昭和五十七年八月、昭和六十一年九月にマイクロバスで下社へお参りする。昭和六十一年十月に上社に本宮が遷座されたので以後、平成元年十月、平成五年十月、平成七年十月、平成九年十月、平成十四年六月、平成十七年八月と近年は上社と下社共にお参りしている。三十八年間に九回お参りして宿泊は門前屋旅館を八回お願いしてきた。お参りの二日の帰り路は近くのフラワーセンターやフラワーパーク、浜名湖遊覧、養老の滝など観光して親睦を深めた。特に平成十七年八月には上社へ午後二時頃お参りするため山頂へ登るに従い深い霧に包まれてきて、車のライトをつけても前方確認するのがやっとのことで、運転士さんも安全に注意し乍ら進めたが、神様に祈る心地であった。運転士さん

の手腕により、無事お参り出来てホッとした。下山のときも猛烈な雷雨で土砂降りとなり、この年の異常な天候で、夕方旅館に着いたときは安堵した。夜も激しい雷雨となったが、二日目は朝からよい天気となり、朝下社にお参りして帰路につき途中、長島温泉近くの「はばなの里」へ行き、ベゴニアガーデンを観光し、他など買ってかえり、良い思い出となった。

講員も減りつつあるとき何時まで続くかは、わからぬが頑張つて続けて行きたいと考えている。

以上拙いまとめで前後した所もありますが、読んでくだされば幸いです。

会長退任の挨拶

森本 一 二

私は、平成十四年三月、前会長堀口春夫様が、病気を理由に退任されました後を受けて、会長に選任されました。

私の会員歴は三十年に余って長いのですが本会の運営には全く係わりもなく、過ごしていましたので、大変心もとない上に堀口様が、本多記念館文書に潰された、深遠な学識にも接していません関係もあり、この大先輩の後に続けるかと危惧しつつ、お受けすることになったのでありました。

しかし、幸いに、副会長、事務局長を始め、役員の方々のご支援を得て、五年間を務めさせていただきました。

その間、会報百号を記念出版し、一〇九号に及ぶ会の歴史の古さと、歴史・文化財などの標示石柱が四十基を越え、郷土研究、地元案内の指標となっていることなど、先輩会員の方々のご努力と成果を誇りとして、職務にあたることのできたのを、大変に有難く存じていました。

然し乍ら近来、老齢のため、行動も制約されるようになり、職責に耐え難くなった事を自覚せざるを得ないようになって来ました。

幸いに本年度総会が役員改選の年に当たっていますので、会長さんはじめ諸役員さんを選出していただきました。

新会長になられた春名俊夫様は、つとに郷土の歴史・地理に詳しい学究の方であり、私の在任中五年間は事務局長として、会運営の中心となり、計画・執行していただき、微細にわたり本会を最もよく知る方でありますので、会長として最もふさわしい方であると信じています。

浅田副会長様・宗平事務局長様は、学識と行動力の優れた知名の方々でありますので本会の発展のために、大いに活躍して戴けるものと信じています。

会員の皆様におかれましては、これからも一層、自己研修に励まれると共に、新会長様はじめ諸役員の方々と協力して、山崎郷土研究会が益々発展しますようにお祈り申しあげます。

最後になりましたが、至らぬ私に賜りましたご理解と、温かいご支援によりまして、職責を終えることが出来ました事を、厚くお礼申しあげ、言葉足りませんが、会長退任のご挨拶といたします。ありがとうございました。

会長就任の挨拶

春名 俊夫

平成十四年岸本事務局長が、任期半ばで体調不良のため退任された後を受けて五年間事務局長を務めさせていただきましたが、

はからずも、平成十九年の総会に於いて森本会長の後を受け会長に選任されました。前会長森本さんは、歴史に詳しく、その研究も研鑽された方でしたが、私はその足元にも寄れないのに会長と言う大役を仰せつかり、会員も七百名に近い団体から、時代の流れとして、かたづけられないくらいに会員数が減少し、厳しさのますなかの就任で会の運営と今後の発展への油やバネの役目ができたらと考えております。

副会長に浅田耕三様・事務局長に宗平圭司様を迎えての船出となりますが、会員皆様とともに郷土の歴史を見据えたうえの良い会であり、牽いては住む町の発展のためにがんばる心構えでいます。皆様のご理解と、力添えをお願いいたします。

就任にあたって

事務局長 宗平圭司

このたびの役員改選で、思いも寄らぬ身に過ぎた役目を仰せつかった事に、戸惑いと不安で一杯です。

幸い知識も経験も豊富な正副会長・各部長にご教示を頂き、又力の足りないところは、会員みなさんのご支援とご協力を仰ぎ、職務を果たしたいと思えます。

どうか格別のご指導を賜りますよう、よろしくお願い致します。

事務局だより

今年度の研修旅行について

次のおり予定しておりますので、お誘い合わせの上、多数ご参加下さい。

期日 九月三十日(日)

行き先 北摂方面(三田市・尼崎市)

会費 八千円(昼食付き)の見込み

『山崎町歴史街道』(十二)

●山崎町の史跡巡りをしませんか●

会報部

四十五 塩田構居跡(城山) 所在 山崎町塩田

大正十二年三月出版の宍粟郡誌に、「菅野村塩田の西山を城山といふ。」とあり、地域の人達もその山を城山と呼んでいる所があります。丁度塩田明証寺前の川を隔てた反対側に当たります。

また、宝暦十二年(一七六二)の播磨鑑(はりまがみ)にも塩田構居跡として「領主は小寺藤兵衛政職(まさもと) 天文一二年(一五四四) 移干此所同一四年 又移干御着城」とあります。一期この塩田に城があったのでしよう。

地元の人に聞きますと、その山の上は平地になっており、近くに五輪さんなどたくさんのお墓があるようです。また、この地域を政所(まどころ)と呼ぶようですが、この事からもこの山に城のあったことが領け、姫路市の御着城と関係があったことがわかります。



塩田構居跡

四十六 塩田の大ツガ(トガ) (宍粟市文化財天然記念物)

所在 山崎町塩田丸山

塩田丸山に、ツガ(トガ)の巨木があります。この巨木はツガにおいては兵庫県で一番大きく、図書ひょうごの巨樹巨木百選にも掲載されています。

場所は、塩田の民家が無くなってからなお奥へ、車で一、五kmほど山道を登ると、山の上に他の樹木よりひときわ高くこんもりとした、ツガの大木が見えます。しかし、そこからは道のない急峻な林の中を一〇〇mばかり登り詰めた所で、そこに大ツガがあります。

根回り七一六cm。幹周五六七cm。樹高二六m。県下第1位。古木のためか中が空洞になっておりますが、樹勢は旺盛で、平成十六年の二十四号台風にも耐え、周りのスギ等の木は倒れ相当被害を受けましたが、大ツガは倒れず今も高く聳えています。



塩田の大ツガ

きれいなカラープリントの店



Specialty Camera Shop
コーポカメラ

本店 宍粟市山崎町東鹿沢 26-3 ☎62-2089
フリーダイヤル ☎0120-440-990
FAX 0790-62-7429
咲ランド店 TEL 0790-63-0533

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本店 TEL (0790)62-0700
さつき通り FAX (0790)62-2117
ブックランド店 TEL (0790)64-2051
山崎町中井 FAX (0790)64-2052

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等



(有) 稲田印刷

〈本社〉〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790)62-0254 FAX (0790)62-4764
〈一宮店〉〒671-4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL (0790)72-8600 FAX (0790)72-8611

山陽 盃

清酒



兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造株式会社

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします

神姫観光

〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)
TEL (0790)62-7588
FAX (0790)62-7589



外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL 0790-0036

呉服とジュエリー

とくさや

本店 本町(さつき通り) 62-1680
咲ランド3F 呉服のとくさや 63-0568
// 2F ジュエリーとくさや 63-0557